

平成 28 年度 「日本音楽学会国際研究発表奨励金」 受領者報告書

福島 睦美 (エリザベト音楽大学・西日本支部)

1. 発表学会について

名称：FIMTE 13th Symposium on Spanish Keyboard Music “Diego Fernández

テーマ：“GRANADOS IN CONTEXT: The Spanish Piano School and Pre-War Artistic Movements”

開催日程：2016 年 9 月 16–17 日

開催場所：Parador de Mojácar, Almería

2000 年にスペインのクラブサン奏者のルイサ・モラレス氏が設立した FIMTE (Festival Internacional de Música de Tecla Española) は、スペインの鍵盤音楽を中心とした演奏会やマスタークラス、ワークショップ等を広く展開している。13 回目を迎えた今年のシンポジウムのテーマは、グラナドス没後 100 年に合わせて、社会的・歴史的背景におけるグラナドスとその周辺のピアノ音楽及び芸術的傾向に焦点があてられた。FIMTE の活動場所は、スペイン南部アンダルシア州のアルメリア近郊の町がほとんどで、シンポジウムの開催場所は、海沿いのリゾート地モハカルのパラドール (国営ホテル) である。

シンポジウムの主催者は、前述のモラレス氏の他、グラナドスの伝記執筆者であり、カリフォルニア大学教授のワルター・A・クラーク氏である。発表者は 23 人であった。そのうちスペインからの参加者は 12 人。アメリカ合衆国 4 人、オーストラリア 4 人 (ただしスペイン人の留学生を含む)、イギリス 1 人、ドイツ 1 人 (スペイン人留学生)、そして日本からは報告者の私であった。

研究発表は、以下のセッションにより進められた。[1 日目]セッション A: 「Cultural Context and Relationships」、セッション B: 「Musical Style, Repertoire, Pedagogy (I)」、[2 日目]セッション B: 「Musical Style, Repertoire, Pedagogy (II)」、セッション C: 「Reception, Recovery and Dissemination of Sources」。一人あたりの割り当ては質疑応答を含めて 30 分であった。発表開始は午前 9 時からで、30 分のコーヒーズブレイクと 3 時間の昼食休憩があり、その間、参加者同士での交流を密に行うことができた。夜には両日とも演奏会が行われ、終了は 21 時を回っていた。また 2 日目には夕食会が 22 時より近くの町で開催された。

2. 研究発表要旨

セッション：Cultural Context and Relationships

発表日時：9月16日 11:30–12:00

発表タイトル：La actividad pianística de Enrique Granadosu en el contexto musical de Barcelona
(バルセロナの楽壇におけるピアニスト、エンリケ・グラナドスの活動)

本発表の目的は、ピアニストとしてのグラナドスの活動を明らかにすることであった。19世紀後半から20世紀初頭のモデルニスモ芸術期の作曲家であると同時に、グラナドスは演奏家としても大きな功績をバルセロナの音楽界に残した。ピアニストとして、パリでの修行を終えたグラナドスは、22歳の時にバルセロナに戻り、以後、そのほとんどの活動を、バルセロナを中心に行っている。自作曲の初演に加えて、バルセロナでは未知であったピアノ作品、そして、室内楽作品の普及にも積極的に携わった。1900年には、クラシックコンサート協会を設立し、オーケストラを組織して指揮者としても指導にあたった。つまり、単にすぐれた演奏家だっただけでなく、聴衆の関心とレベルを高める、といった点で、楽壇において大きな原動力となったのである。また後進の育成のために、アカデミア・グラナドスも創設した。

このように、グラナドスの活動は多岐に渡るため、本発表ではピアニストとしての活動を次のように集約して述べた。また、時間の制約も考慮し、スクリーンでは、各演奏会の日時、場所、演奏曲目、共演者、批評の一部をまとめて提示しながら発表を進めていった。

◆デビューコンサートを含む初期の演奏会

グラナドスの正式なデビューコンサートは、1890年4月20日、リリコ劇場においてである。自作のピアノ作品に加えて、他の演奏者と室内楽作品も演奏している。この演奏会は一年後にも同劇場で再開催されたことが判明した。これは話題性の大きさを証拠づけている。

1892年4月10日には、グリーグのピアノ協奏曲をスペイン初演した他、オーケストラのための《スペイン舞曲集》を指揮して、ピアニスト、作曲家、指揮者の3役を果たした。

この後グラナドスは、《スペイン舞曲集》の作曲に集中し、演奏活動からは一時退いたが、1895年にカタルーニャ・コンサート協会の演奏会で再び演奏活動を開始した。この時期は、主に室内楽を中心とする演奏会への参加が多く、M・クリックボーム、J・ティボー、P・カザルスなど弦楽器奏者との共演が目立った。

◆1899年–1903年の活動

この時期の演奏会で傑出していたものは、1899年6月にジョアキン・マラッツと開催したピアノ・デュオ・リサイタルである。演奏曲目のほとんどがバルセロナ初演であったことに加えて、2人の人気ピアニストの共演ということもあり、チケットは完売であった。批

評では、「テクニックに定評のある」マラッツと「詩的な演奏を行う」グラナドスを対比させたものが目立った。この演奏会は、聴衆からの強い希望で1週間後に再演されたほか、1907年にも同じプログラムで再演された。これは、演奏会史上では稀なことであり、バルセロナにおける歴史的な演奏会と判断することができる。

◆1904年－1910年の活動

グラナドスは1906年春に、スカララッティのクラブサンのためのソナタをピアノに編曲し、紹介した。この時受け取った、「グラナドスはすぐれた演奏者というだけでなく、我が国の榮譽である」という賛辞からも、その卓越ぶりがうかがえた。

また1908年初春には、バルセロナ音楽協会が主催した、グリーク音楽祭とサン＝サーン音楽祭にソリストとして出演し、5月には完成したばかりのカタルーニャ音楽堂でリサイタルも行った。

◆《ゴイエスカス》の初演

代表作となっているピアノ組曲《ゴイエスカス》第1部の初演は、1911年3月に行われた。メディアの多くは、作曲家とピアニストの両面から、グラナドスの功績を称えた。

◆1911年から1915年の活動と最後の演奏会

この時期のピアニストとしての活動は、1912年に新設したコンサート・サロン「サラ・グラナドス」における演奏会や《ゴイエスカス》に関連するプロジェクトが顕著である。歌劇《ゴイエスカス》の初演のために、ニューヨークに発つ前に行った演奏会が、最後の楽壇登場となった。1915年11月14日、室内楽協会が主催したもので、この時グラナドスはこの協会の芸術監督に就任している。

まとめとして、グラナドスのピアニストとしての活動を俯瞰し、メディアからの批評をもとに、演奏家としての特性やレパートリーを明らかにした。

3. 質疑、反響と感想

今回のシンポジウムでは、各発表のあと、質疑や感想を述べる形式が取られた。報告者の発表では、時間の都合により省略した《ゴイエスカス》初演時の他の演奏曲目について質問を受けた。反響としては、これまで明らかにされてこなかったピアニストとしての活動を年代別に取り上げた点、そしてそれを、作曲家、教育者、プロモーターとしての側面と照らし合わせていった点で良い評価を受けた。まとまった演奏会記録がない中、図書館や古文書館で当時の新聞や雑誌から演奏会情報や批評を探す地道な作業を行ったことも評価につながった。

学会全体で感じたことは、語学の大切さである。特に今回の発表では、スペイン語と英語が共有言語となっていたが、両方の言語で質疑応答がなされることはなかった。スペイン語を母国語とする者が多かったこともあり、アメリカ合衆国からの参加者にはやや不満が残ったかもしれない。なぜなら、休憩中や食事時間に有益な情報交換が行われることも

多かったからである。

また、最寄りの空港から車で 1 時間という立地やホテルの少なさにはかなり問題があった。アクセス面の悪さをカバーできるだけの代案があればよかったが、開催ぎりぎりになっても事務局との連絡が取れず、どの参加者も頭を悩ませていたことが判明した。実際、参加を諦めたり、ペーパーの提出のみにとどまったりした発表者も数人いたため、改善の必要性を強く感じた。

今回の国際シンポジウムへの参加は、報告者にとっては、19 世紀後半から 20 世紀におけるスペインピアノ音楽の研究者たちと交流できる絶好のチャンスであった。普段は各地に散らばっている同分野の研究者たちの発表を聞き、新しい発見に触れ、お互いの研究内容についてコメントし合い、切磋琢磨できたことはとても有意義な経験となった。

末筆ながら、このような機会を与えてくださった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に深く感謝を申し上げる次第である。